慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アイヌ散文説話におけるトパットゥミをめぐる分析 : アイヌ (人間) の安全保障の考察に向けて
Sub Title	An analysis of daily life in the Aynu prosaic folktales : towards the study of Aynu (human) security
Author	山田, 慎太郎(Yamada, Shintarō)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2019
Jtitle	Keio SFC journal Vol.19, No.1 (2019.) ,p.128- 160
JaLC DOI	10.14991/003.00190001-0128
Abstract	本論文は、アイヌ散文説話における人々の日常生活の再建過程に着目し、先住民社会における日常生活の再建のあり方を研究する。そのうえで、彼らの生活再建のあり方が、現代社会における生活再建をめぐる課題においても重要であることを指摘しようと試みる。先住民社会から現代的な概念を考察することを通して、我々が久しく蔑ろにしてきた先住民社会が育んだ知を知ることは、現代社会に生きる我々にとっても重要である。
Notes	自由論題 研究論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-1901-0128

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

［研究論文］

アイヌ散文説話におけるトパットゥミをめぐる分析

アイヌ（人間）の安全保障の考察に向けて

An Analysis of Daily Life in the Aynu Prosaic Folktales

Towards the Study of Aynu (Human) Security

山田 慎太郎
東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻 多文化共生・統合人間学プログラム
修士課程２年*

Shintaro Yamada
Second year of Master's degree, Integrated Human Sciences Program for Cultural Diversity, Department of Area Studies, Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo

Abstract: 本論文は、アイヌ散文説話における人々の日常生活の再建過程に着目し、先住民社会における日常生活の再建のあり方を研究する。そのうえで、彼らの生活再建のあり方が、現代社会における生活再建をめぐる課題においても重要であることを指摘しようと試みる。先住民社会から現代的な概念を考察することを通して、我々が久しく蔑ろにしてきた先住民社会が育んだ知を知ることは、現代社会に生きる我々にとっても重要である。

This paper focuses on the reconstruction process of people’s daily life in Aynu prosaic folktales and studies the way of reconstruction of everyday life in the indigenous society. In addition, I try to point out that their way of life reconstruction is also important in the task of reconstructing livelihoods in modern society. Through the consideration of contemporary concepts from the indigenous society, it is also important for us living in a modern society to know that the knowledge fostered by the indigenous society.

Keywords: アイヌ、口承文学、生活再建、人間の安全保障、現代社会
Aynu, oral literature, reconstruction, human security, modern society

*投稿時の所属は、慶應義塾大学総合政策学部４年

1　はじめに

「アイヌ（aynu[1)]）」とは元々「人間」を意味する単語である。先住民族であるアイヌの人々は、口承によって豊かな物語世界を描いてきた。そのアイヌ口承文学のなかに散文説話と呼ばれるものがある。散文説話とは北海道日高地方で話されるアイヌ語ではウェペケレ（uepeker）といい、節をつけず抑揚を抑えた口調で語られる散文の物語である。散文説話にもいくつか種類があるが、その一つに人間の散文説話がある。これは人間の視点から世界を見た物語で、人間が主人公となり、その主人公の人生を振り返るようにして語られる。また散文説話は、実在の人物が体験したこと（事実）を子孫に語り伝えたものであるとアイヌの人々に信じられていた[2)]。そのため物語にはアイヌの人々の生活が色濃く映し出されている。

散文説話は、基本的にハッピーエンドで締めくくられる。基本的な展開は次のとおりである。主人公が様々な困難に見舞われるも、カムイ（kamuy／神的存在）の助けを受けながらそれを乗り越える。その結果、人々からも尊敬されるようになり、子どもにも恵まれ、豊かな暮らしを送るようになる。主人公が豊かで幸せな暮らしを送るためには、カムイに信頼され見守られる必要がある。アイヌの人々にとって、これは個人の徳のようなものと関わっており、豊かである者はカムイに見守られている者であると考えられていた。

物語では、ある出来事がなぜ起き、その結果何があったのかが順を追って説明される。アイヌの人々は、彼らにとってしっかりとした理屈が通っていることを重んじており、それは散文説話においても同様に重視されている。理屈を重んじ、言葉による説明を大切にする彼らにとって、争いごとは基本的にはチャランケ（caranke）によって解決されてきた。これは日本語で談判と呼ばれるもので、原告と被告双方の立ち合いのもと言葉を交わして村の長老を中心に周囲の者が両者を裁く、裁判のような形式をとる紛争解決の手続きである。

こうした手続きとは別に、トパットゥミ（topattumi）と呼ばれるものがある。トパットゥミとは、ある集落の人々が一団になって他の集落を襲い、集落の住民を皆殺しにして宝物などを奪うことである。一つの集落でなく複数の集落が集まって襲うこともある。日本語では夜襲や群盗と訳される。この他に

昼のトパットゥミ（tokap topattumi）と呼ばれるものもある。一度トパットゥミをしかけた村の生き残りを探すために、時間を空けて襲うものである。物語によってはこのどちらも描かれているものもある。トパットゥミ自体がどのような理由でなされるかについては明らかにされていない。しかしトパットゥミはチャランケとは異なり、暴力によって事を成そうとするものである。

言葉による解決が重視されるアイヌの文化において、言葉による解決を伴わないトパットゥミは散文説話において数多く登場する。しかしトパットゥミが描かれる散文説話においても、トパットゥミそのものをアイヌの人々がどのように意味付けていたのかについてはほとんど言及されない。一方で主人公の住む集落が襲われた後、主人公が日常生活を取り戻す過程は描かれている。日常生活には村（kotan）や家屋、食料といったものから、社会関係や人間関係、カムイ（アイヌにおける神的存在）との関係といったものまである。それら全てが再建のプロセスを経て取り戻されていく。

日常生活を脅かす出来事に見舞われた後、再び生活を取り戻すような事態は現代でも形を変えて存在している。世界の様々な地域で紛争や政治的混乱などによって日常生活を奪われてしまった人々が、日常生活を取り戻そうとしている。これはどうすれば人間が安定して安全に生きることができるかという問題ともいえる。

本研究では、散文説話において日常生活を大きく変化させるモチーフとしてトパットゥミを取り上げ、彼らの生活再建のあり方を明らかにしようと試みる。そのうえで「日常生活の再建」をアイヌ先住民社会の考え方で詳細に考察することを通じて、彼らが日常生活を再建するうえで重要な点が、現代社会における生活再建をめぐる課題においても重要であることを指摘しようとするものである。

2　本論文の位置付け

散文説話をはじめとする物語を複数参照しながら、そこに通底する論理を見出すような研究は、先行研究においてもなされている。

中川（1989）は「口承文芸にみるアイヌ人と和人との関係」のなかで、口承文学とアイヌ社会の関係性を考察している。この論文において中川は、「アイ

ヌ民族の口承文芸は、和人による文献記録、考古学資料と並び、彼らの歴史を再構成する手掛かりの最重要要素の一つである」(中川 , 1989, p. 73) とし、口承文学を歴史資料として扱うことに言及している。中川はその取り組みとして、物語において和人との関係をアイヌの人々がどのように捉えていたのかについて、物語ジャンルを超えて複数の資料を基にした横断的な分析を行い、類型化を試みている。中川 (1989) が研究した時点においては、関係する膨大な資料の多くが利用不可能な状態にあった。膨大な資料の整理と公開にも取り組まねばならない研究環境のなか、その論旨の将来的な修正可能性を踏まえつつ、できる限り幅広い資料にあたって分析を行っている。その点において中川 (1989) による研究は、続く児島 (2010) や坂田 (2015)、奥田 (2017) らの研究関心に先駆けるものとして位置づけられる。また、こうした口承文学と社会の関係についての研究は、古くは知里 (1973) における英雄叙事詩の持つ歴史性に関する論考にまで遡ることができる。

このような研究の系譜があるなかで、奥田 (2017) は、昨今のアイヌ口承文学で物語のアーカイブが充実していく一方で、未公開資料の存在もまた明らかになっている現状を指摘する。そして今後の研究の展望として、できる限り「開かれた資料群」(奥田 , 2017, p. 248)、つまり研究ノートや未公開資料など多様な性格を持つ資料に基づいた横断的な分析が必要であるとする。

本研究はこうした研究の流れの中にあり、奥田 (2017) の指摘するようにアーカイブの進展や資料の整理が進んだ現在における研究課題に取り組むものとして位置づけられる。つまり本研究は、限られた資料ではなく、できる限り「開かれた資料群」に基づいて横断的な分析を試みるものである。

本研究における方法論的な課題に対する先行研究とともに、口承文学の分析における課題に取り組む先行研究もある。まず中川による論文「口承文芸に見るトパットゥミ」が挙げられる。中川 (1998) は、トパットゥミというモチーフが物語をドラマチックに変える点を指摘している。つまり、「トパットゥミそのものが聞かせ所のある題材なのではなく、そこで生み出される人間ドラマというものが『聞かせどころ』」(中川 , 1998, p. 56) になっているという。

それに対して本論文は、アイヌ散文説話に彼らの社会が色濃く映し出されていることを重視する。本論文ではトパットゥミを含む散文説話において描

かれるのは、実際にトパットゥミによって日常生活を奪われた主人公らがその後日常生活を取り戻すまでの過程であると考える。日常生活には生活基盤だけでなく、主人公が持つ社会関係や人間関係、カムイとの関係も含まれている。複数テクストの横断的な分析を通して当時のアイヌの人々の考え方や知を捉えようと試みる。

本論文も試みるように現在の研究環境において、複数の散文説話を横断的に分析しながら散文説話からアイヌ社会について考察した研究として、児島(2010)による「散文説話の社会的機能」が挙げられる。児島(2010)は幅広いテクストを横断的に分析したうえで、散文説話について「ある種社会的な機能を表した名称で、理想的なコタンの歴史を明らかにして、アイヌ社会の方向性とか規範を与える」(児島, 2010, p. 306)ものであると述べている。また、児島(2010)もその分析のなかでトパットゥミが描かれる散文説話を取り上げている。したがって本論文は、児島(2010)が提起した散文説話の社会的機能について、トパットゥミの描かれた散文説話に絞り、具体的に考察したものとしても位置づけられる。

坂田(2015)はFoleyによる口承文学研究を引きながら、アイヌ口承文学における様々なモチーフや話型などが形式的な決まり事でなく、それぞれが意味の単位として機能している点を指摘する。坂田はこの問題に取り組むべく、報告書ではパイロット研究として、村の滅亡と再生をテーマにして分析を行っている。複数の物語資料を横断的に分析したうえで、村の滅亡につながる原因となるモチーフ(嫉妬、疱瘡、トパットゥミ)を示す。そして、それぞれのモチーフ間の関係性を明らかにしながら「人間の村は再生する(＝滅びない)」(坂田, 2015, p. 4)という命題がこのテーマを有する物語群における共通点であるとした。坂田(2015)は物語において主人公が孤児になったり、村が滅亡したりするような展開には、同時に再生というテーマが既に含まれていることを指摘する。そしてこれは、人間社会におけるある種の不条理(人同士の滅ぼし合い、滅亡)に対して、アイヌの人々が再生という展開を加えることで「はじまり」を描いているものであるという。それぞれのモチーフ(嫉妬や疱瘡、トパットゥミ)が単に滅亡の原因を表しているのではなく、それがきっかけとなって物語が再生へと向かっていくのであり、「滅亡のなかに既に再生は含み

こまれている」(坂田 , 2015, p. 4) と述べている。

本論文は坂田と同じく、トパットゥミを描く散文説話を村の滅亡と再生を描くものとして捉える。そのうえで、トパットゥミの後主人公がどのようにして生活を再建するか (再生) に着目して分析を行ったものとして、坂田による滅亡／再生テーマについてより具体的に分析を行ったものと位置づけられる。

また奥田 (2017) は、「開かれた資料群」をもとにした横断的分析の必要性を指摘する一方で、実際に分析における方法論提示も試みている。例えば「散文説話に描かれる幸福観」について、複数の語り手の物語における語り方の違いに着目した。そのうえで、村の復興について、悪者の村以外は復興する結末と悪者の村の生き残りと共に新しい村を再興する結末があるとする。そして、それらの分析から一見異なる結末を描いているようにみえる物語同士であっても、「先祖伝来の宝物がこの世の人間に継承されることを語ることによって、もとの村を復興するのと同じ意味を持つ幸福な結末が描かれている」(奥田 , 2017, pp. 258-259) と解釈できる例を示している。これは坂田 (2015) と同じく、複数の物語に通底するモチーフの意味を分析するもので、奥田はその方法を具体的に示している。本論文も奥田 (2017) と同じく、ストーリー上の展開の違いとその中において通底する共通の考え方に着目して散文説話の分析を行う。

3　対象とする散文説話

対象とする散文説話を主にアーカイブから取り上げた。近年、アイヌ口承文学は様々なアーカイブを通じて新しい物語の公開が進んでいる。それらのアーカイブでは原文と和訳文に加え、訳注なども充実しているため積極的に活用する。また、アーカイブ以外に文献からも取り上げた。こちらも原文と和訳文があり、訳注が付されているものである。これらから以下の通り 14 編の散文説話を取り上げた。なお、各説話の出典の詳細は注に記す。

(説話 1) 木村きみ「ぶどうづるの輪がトパットゥミを退けてくれた話 [3)]」
(説話 2) 木村きみ「霞の架け橋 [4)]」
(説話 3) 木村きみ「猫の神様に育てられた少年の話 [5)]」

（説話 4）鍋沢ねぷき「アコロ　エカシ　イレス[6)]」
（説話 5）平目よし「トパットゥミ　オッタ　アサハ　トゥラ　アエイッカ[7)]」
（説話 6）黒川てしめ「アスチヒ　イレス[8)]」
（説話 7）平賀さだも「ケソラップ　カムイ　イレス[9)]」
（説話 8）木村きみ「トパットゥミのウエペケレ[10)]」
（説話 9）上田トシ「河童に助けられた男の話[11)]」
（説話 10）上田トシ「夜襲で滅びた村の孤児姉弟の話[12)]」
（説話 11）白鳥ヨソコ「ルペシペの娘の物語[13)]」
（説話 12）白沢ナベ「トパットゥミから逃れたウライウシナイの少年[14)]」
（説話 13）川上まつ子「私はおじいさんに育てられて[15)]」
（説話 14）知里プイヌマッ「uyepekere chiri buinumat kip[16)]」

4　説話分析の方法

取り上げた説話は原文と日本語訳文を対照させながら詳細を検討する。そのうえで説話から複数の着眼点を設定し、説話ごとにテクストからその着眼点を取り出し Excel を用いて整理した。それを補助資料として用いながら、主人公がトパットゥミによって奪われた日常生活をどのように再建していくのかを分析する。

また、その他に説話ごとに主人公を中心とした人物関係を整理するために図式化したものも補助資料として用いた。これは主人公を含む登場人物の人間関係の変遷を追うことで、トパットゥミによって人間関係がどのように再編されるのかを分析するためである。以上、二つの補助資料[17)]を用いつつ、主人公がどのようにしてトパットゥミによって奪われた日常生活を再建していくのかを横断的に分析する。次章以降では、以上の分析方法に基づいた具体的な考察を述べる。

5　トパットゥミからどのように生き残っているのか

トパットゥミから主人公が生き延びるためにはトパットゥミが起きた時に、①その場にいないか、②敵に見つからないでいるか、③敵方の人間に連れ帰られるかの三通りある。話が進むうちに、それぞれのパターンの中にも複数

のパターンが出てくる。

5.1　その場にいない場合

主人公はトパットゥミが来る前に村の外に出ていることでトパットゥミに襲われず生き残ることができる。

［該当する説話］４編

（説話 1）『ぶどうづるの輪がトパットゥミを退けてくれた話（木村きみ）』

→おばあさんに背負われて散歩していたために助かる。

（説話 6）『アスチヒ　イレス（黒川てしめ）』

→おばあさんに連れられてウバユリ掘りに行っていたことで助かる。

（説話 10）『夜襲で滅びた村の孤児姉弟の話（上田トシ）』

→姉が主人公をおぶって山に行っていたことで助かる。

（説話 12）『トパットゥミから逃れたウライウシナイの少年（白沢ナベ）』

→兄弟で魚捕りから戻り村に入る直前で、見知らぬ人影を見て不審に思い身を隠したことで助かる。

昼のトパットゥミ

①ではトパットゥミの後、主人公は共に生き延びた人物によって育てられることになる。しかし、その後も命の危険に晒されることがある。生き残りがいないかを確認するための昼のトパットゥミである。以前トパットゥミに来た者たちが昼間のうちに、主人公らが住む小屋の様子を窺い、生き残りがいないかを確認する。そして夕方になると、今度は部屋の中へと入り、生き残った者たちを殺そうとするのである。その後の展開は、説話ごとに異なる。

［該当する説話］３編

（説話 1）『ぶどうづるの輪がトパットゥミを退けてくれた話（木村きみ）』

主人公がとってきたぶどうづるを共に生き延びた主人公のおばあさんが輪のように編み、それを戸口や窓などにかける。その後やって来たトパットゥミの一団は、あらかじめかけてあったぶどうづるの輪によって

返り討ちにあい全滅する。この輪のおかげで、主人公とおばあさんは助かる。

→カムイの力によって返り討ちにする。

(説話 2)『霞の架け橋 (木村きみ)』

姉は妹をゴザで包み、その上から祭壇を倒して妹を隠した。しばらくすると、姉の叫び声が聞こえ姉は殺されてしまうが、妹は敵に見つからずに助かる。

→妹を守るために姉が殺される。

※『霞の架け橋』では前後で主人公が入れ変わっている。冒頭では妹が、昼のトパットゥミに襲われてからは生き残った妹の兄が主人公になっている。この昼のトパットゥミでは、主人公である妹とその姉が襲われている。一度目のトパットゥミでは、妹をおぶって沢で遊んでいた姉が、見知らぬ人間の声を聞いて身を隠したことで助かっている。二人はその後、父親の山の倉のそばに小屋を立て生活していた。そこに昼のトパットゥミがやってくる。その後主人公となる兄は、この時点で既に敵方の村で育てられているため襲われていない。

(説話 10)『夜襲で滅びた村の孤児姉弟の話 (上田トシ)』

一度目のトパットゥミから生き延び、主人公と姉は村はずれに家を建てて暮らしている。ある日姉が山へ行っている間、留守番をしていた主人公が川向こうの葦原に隠れる三人の男を見つけた。それを聞いた姉は昼のトパットゥミが来たと言い、夕食を終えると主人公を家の隅に掘った穴の中へ入れ、上から草を被せて隠した。姉は外に聞こえるように自らの不運を嘆く歌を歌いだす。するとそれを聞いた 3 人組の男が中へ入って来て、生き残りが他にいないか姉に確認し、しばらく相談した後姉を連れ去ってしまう。主人公は姉が独り身であると嘘をついたことで敵に見つからずに済む。

→姉が敵に連れ去られる。

ここから分かるのは、主人公以外の登場人物も含めて人々は一度トパットゥミから生き延びたとしても、避難生活をしている限り危険に晒されるリスクが高いということである。物語においても避難生活はあくまで避難生活で

あり、それが日常化しても安定した生活には至っていない。主人公らが安定した生活を営むためにはコタン (kotan) の存在が必要になる。

5.2　敵に見つからない場合

トパットゥミが来た際、村の中にいるものの、両親らに隠されることで敵に見つからず生き残ることができる。

［該当する説話］５編

(説話 3)『猫の神様に育てられた少年の話 (木村きみ)』

→母親によって主人公の上に祭壇が被せられたことで見つからずに済み助かる。

(説話 4)『アコロ　エカシ　イレス (鍋沢ねぷき)』

→父親によって主人公の上に祭壇が被せられたことで見つからずに済み助かる。

(説話 7)『ケソラップ　カムイ　イレス (平賀さだも)』

→何者かによって主人公の上に祭壇が被せられたことで見つからずに済み助かる。

(説話 13)『私はおじいさんに育てられて (川上まつ子)』

→母親によって主人公の上に祭壇が被せられたことで見つからずに済み助かる。

(説話 14)『uyepekere chiri buinumat kip (知里プイヌマッ)』

→両親によって主人公は小袖に包まれ、その上に祭壇が被せられたことで見つからずに済み助かる。

②の場合、主人公は赤ん坊で、周りに誰も生存者がおらずたった一人になってしまう。これは身寄りを失い、誰かの助け無くしては生存すら危うい状況といえる。他の二つの場合とは異なる形で生命の危機に瀕している。主人公はトパットゥミで命は奪われなかったものの、そのまま誰にも見つけられなければ亡くなってしまう。このように主人公が赤ん坊として一人生き残ることは、著しく弱い立場にある者が日常生活を奪われた場合を表していると

考えられる。

主人公はトパットゥミの後にやってくる人間やカムイによって助けられることになっている。これは物語展開上の要請であるかもしれないが、アイヌの人々の考え方が現われているとも考えられる。著しく弱い立場にあって、生存すら危機的な状態にある者に対しては助けがやってくる。もしくは、やってこなければならないという考え方である。実際、助けた人物は主人公が大きくなるまで親代わりになっている。その親代わりになる存在は(1)カムイ、(2)主人公と何らかの関係がある人間の二通りある。

(1) 親代わりになる存在がカムイの場合

(1)では、主人公の両親が常日頃祭っているカムイではなく、何らかのタイミングで主人公の親から恩を受けていたり、主人公を不憫に思ったりしたカムイが助けにくることになっている。

[該当する説話] 3編

(説話3)『猫の神様に育てられた少年の話(木村きみ)』

→主人公の叔父が飼っていた猫の夫婦が主人公を不憫に思い、人間に化けて主人公を育てる。

(説話4)『アコロ　エカシ　イレス(鍋沢ねぷき)』

→主人公の父親によって丁重に送ってもらった雄熊のカムイがその恩に報いようと人間に化けて主人公を育てる。

(説話7)『ケソラップ　カムイ　イレス(平賀さだも)』

→幣棚で隠された主人公たちを見て不憫に思ったケソラップ[18]のカムイが、人間に化けて主人公を育てる。

(2) 主人公と何らかの関係がある人物が親代わりになる場合

(2)では、主人公と関係がある人物が助けにくる。主人公の親族である場合と主人公の両親と近しかった人物である場合とがある。

［該当する説話］２編

（説話 13）『私はおじいさんに育てられて（川上まつ子）』

→主人公の父親よりも先に山へ入っていた主人公の祖父がトパットゥミを免れた後に村へと戻り、幣棚に隠されていた主人公を見つけて親代わりとなり育てる。

（説話 14）『uyepekere chiri buinumat kip（知里プイヌマッ）』

→トパットゥミを免れた主人公の両親に仕えていた男が、幣棚の後ろに隠されていた主人公を見つけ親代わりとなり育てる。

(1)と(2)どちらにおいても、主人公はカムイや人間による助けなしには生き延びられない。(1)の場合、最終的にカムイであることが主人公によって見抜かれるか、カムイが主人公に正体を明かすことで人間同士としての関係が終わる。人間に化けていたカムイは天界へと戻り、形としてはカムイと人間の関係へと変化し、親代わりであったカムイは主人公の守り神になる。

「人間－人間（に化けたカムイ）」という関係から「人間－カムイ」という関係への変化は、物語における非日常的な状態が日常的な状態へと変化していることを表しているのではないだろうか。本来人間とカムイは別の存在である。それが界を一にして同じ存在として並存する状態は非日常的である。これは主人公の置かれている非日常的な状態（生存の危機）と、主人公とカムイの関係における非日常的な状態（疑似的な親子関係）がリンクしていることを示している。

(1)では、身寄りを失い生存の危機にある主人公をカムイが助け、主人公の成長を支えている。これはカムイによる主人公への生活支援である。通常であれば、カムイが動物などになって下界を訪れ、その動物を主人公が狩ることで生活支援が達成される。しかし、生活基盤すら持たない主人公（赤ん坊）の生活を通常の方法で支えることは難しい。そこで緊急的にカムイ自らが人間に化けて、直接主人公の生活を支える。このようにして、本来は別の存在である人間とカムイが同じ世界に同じ存在として並存することになる。

しかしこの関係は、主人公が少なくとも生命を維持できるだけの生活が営める段階になるまでの緊急的なものである。主人公が自活できるようになる

とカムイは支え方を変化させる。ここで、人間とカムイの関係は正常化（日常的な状態へと戻る）される。しかし、未だに主人公はある種の避難生活を送っている段階にある。

ただし、こちらも主人公の生活は日常的な状態へと戻っていると考えられる。主人公は何とか自活できるようになった時点で、それより先は主人公の精神の良し悪しによって、生活を再建できるようになるからである。物語では主人公に徳があれば、その時点で苦しい環境にあろうと最後には幸せな生活を送れるようになる。その最初の段階に立つという意味で、主人公が自活できるようになった時点で、主人公を取り巻く環境は日常的な状態へと戻っているといえる。主人公が日常生活を送れるようになることと、主人公を取り巻く環境が正常化されること、という両者の位相は必ずしも一致していないことが明らかになる。

表１　人間とカムイの間にみられる関係変化とその転換点

両者の関係	『猫の神様に育てられた少年の話』	『ケソラップ　カムイ　イレス』	『アコロ　エカシ　イレス』
人間－人間に化けたカムイ	主人公と猫のカムイは実質的な親子関係	主人公とケソラップのカムイは兄弟関係	主人公と雄熊のカムイは実質的な親子関係
人間－カムイ	主人公と猫のカムイは守り神の関係	主人公とケソラップのカムイは守り神の関係	主人公と雄熊のカムイは守り神の関係
関係の転換点	主人公が大きくなり身の回りのことを自分でできるようになる。	主人公の身を脅かす存在をすべて排除する。（主人公の成長と共に、カムイが人間世界の環境を整える）	昼のトパットゥミにきた連中を皆殺しにし、主人公の身を脅かす存在を排除する。（主人公の成長と共に、カムイが人間世界の環境を整える）

物語におけるカムイと人間の等役割性

ここでは、②の場合における物語の展開から、主人公を庇護するという点で、カムイと人間の果たしている役割が等しいことを指摘する。物語の展開におけるカムイと人間の「等役割性」は、カムイと人間が互いに「ずれ」を持ち

ながら、その役割において同等であることを意味する。

例えば（説話 7）『ケソラップ　カムイ　イレス（平賀さだも）』では、兄代わりとなって主人公を育てていたケソラップが主人公を庇護するだけでなく、その後の主人公の生活において危険な存在（魔物）を退治するように動いている。一方で、カムイでなく人間が主人公を襲ったコタンに仕返しするものもある(『トパットゥミ　オッタ　アサハ　トゥラ　アエイッカ(平目よし)』など)。これらの説話で共通する役割は、主人公が生活する上で脅威となる存在を排除するということである。主人公の生活を再び脅かす存在である魔物や敵のコタンを排除するべく、主人公と関係のあるカムイや人間が手を貸している。

主人公が生活を再建する際にもカムイと人間の役割が共通している。主人公の守り神となって主人公の生活再建を支えるカムイ（『猫の神様に育てられた少年の話（木村きみ）』など）に対して、主人公のために家を建てたり、主人公が再建する村に移住したりして主人公の生活再建を支える人間（『私はおじいさんに育てられて(川上まつ子)』など）がそれぞれの説話で描かれている。

このようにカムイと人間は異なる方法（この方法の差をズレと捉える）を通じてそれぞれ同じ役割を担っている。この等役割性については、藤田（2009）も飢饉をモチーフとするアイヌ神謡を検討する中で、「飢饉をもたらす原因における人間とカムイの対称性」（藤田 , 2009, p. 71）として両者が同様の役割や位置づけにあることを示し、カムイと人間の対等性を指摘している[19]。

5.3　敵方の人間に連れ帰られる場合

トパットゥミが来た際、主人公は両親らによって見つからないように隠されたものの敵方の人間によって助け出されて生き残る。

［該当する説話］４編

（説話 2）『霞の架け橋（木村きみ）』

→主人公は家の中のシントコ（行器）の前で他の村人たち同様に眠らされているところを、トパットゥミに参加していたイシカラ川の河口の長者夫婦が見つけ、連れ帰られることで助かる。

（説話 8）『トパットゥミのウエペケレ（木村きみ）』

→主人公は石狩からトパットゥミに来た育ての父たちによって連れ帰られることで助かる。

(説話 5)『トパットゥミ　オッタ　アサハ　トゥラ　アエイッカ (平目よし)』

→主人公はトパットゥミに参加していた育ての両親によってシントコの中に入れられていたところを見つけられ、連れ帰られることで助かる。

(説話 11)『ルペシペの娘の物語 (白鳥ヨソコ)』

→主人公は育ての父についてトパットゥミに参加していた下の兄によって幣棚のそばにある大きな塗り桶に隠されていたところを見つけられ、連れ帰られることで助かる。

③の場合、トパットゥミにやってきた敵方の村人が主人公を見つけ、連れ帰って育てている。そのため一度目のトパットゥミで助かった後も再び命を狙われることが多い。③では、一度目のトパットゥミから逃れた後に次のように二通りのパターンがある。(1)育ての両親や村人に命を狙われる。(2)村人らに命を狙われるものの、育ての両親によって最後まで助けられる。

(1) 育ての両親や村人に命を狙われるパターン

(1)では、主人公が夢を通して自らの出自を知ってしまったり、復讐を恐れる両親や村人たちにそうした夢を見ていることを勘付かれたりすることで命を狙われる。ただし、主人公をいつも可愛がっている義兄姉らによって主人公はうまく逃げ出せることになっている。また、物語の最後で主人公を救った義兄姉らも無事であることが明かされる。

(2) 育ての両親によって最後まで助けられるパターン

(2)でも同様に主人公は命を狙われるものの、主人公の命を狙うのは育ての両親ではなく村人たちである。また、主人公を助けるのは義兄姉ではなく育ての両親になっている。同じく物語の最後で両親が無事であることが明かされる。

この二パターンに含まれないものとして、主人公自らが知らぬ間に主人公

を襲った存在を排除している場合がある(『霞の架け橋』)。主人公はトパットゥミに襲われた際、無理やりトパットゥミに参加させられていた育ての両親によって連れ帰られる。やがて成長した主人公は、ある晩に突然現れた霞の架け橋を渡る。するとその先にトパットゥミを仕掛けた村がある。主人公はその村が主人公を襲った村であると知らずに、村人たちを皆殺しにし、橋を渡って育ての両親の村へと戻る。その後、育ての両親から主人公の出自が明かされる。

また『河童に助けられた男の話(上田トシ)』については、主人公の住む村にトパットゥミが来ておらず、主人公が訪れる村についても河童の力によってトパットゥミが未然に防がれるためこの分類では除いている。

主人公が素性を知る方法とそれに伴う生き延び方の違い

また、③では自らの素性をどのように知るかで生き延び方が変わってくる。主人公らがどのように素性を知るのか説話ごとに梗概を用意したうえで、生き延び方の違いを分析する。

［該当する説話］4編

(説話2)『霞の架け橋(木村きみ)』

主人公は育ての両親や兄姉からとても可愛がられて育つが、家の外で他の子と遊ぶことは禁じられていた。大きくなると、下の姉とともに別棟で暮らすようになり、何をするともなく不自由のない生活を送っていた。ある日、頭を床につけるたびに子どもの泣き声が聞こえるので、急いで声の聞こえる方へと沢を上っていくとゴザに巻かれた小さな女の子を見つける。家へ連れて帰り訳を聞いてみて、主人公は自らもトパットゥミから連れ帰られたのではないかと思う。

ある夜、天窓から霞の架け橋がかかっており、行けば何かわかるかもしれないと思った主人公は橋を渡り、辿りついた村でわけもわからないまま村人たちを皆殺しにした。

またある夜、父たちの話し声がして主人公は中に入り話を聞くと、これまでは主人公が他の村人に殺されたり、また他の村からトパットゥミ

が来たりすることを恐れて隠していたが、主人公がトパットゥミで連れ帰られたことが明らかになる。

(説話 5)『トパットゥミ　オッタ　アサハ　トゥラ　アエイッカ (平目よし)』

主人公は育ての両親に可愛がられて育つ。少し大きくなると主人公より少し大きな女の子が遊びにくるようになり、主人公はその子にも可愛がられた。主人公とよく遊んでいたその女の子は育ての両親にも可愛がられていたが、ある日を境にその子が来なくなってしまう。不思議に思っていると、それまで実の両親だと思っていた育ての両親から、その女の子と主人公が姉妹であり、トパットゥミに襲われた際別々に引き取られたことが明らかにされる。その姉は主人公が妹であるとわかって遊びに来ていたと考えた村人によって殺されてしまった。育ての両親は他の村人たちから主人公を殺すように言われたが、可愛がって育てたため、うまく逃げて仕返しをするよう言って、主人公を舟で逃がす。そのうちたどり着いたところで、主人公は大叔父に会い、実父とも再会を果たす。主人公は実父や大叔父の息子たちとともに育ての親のいる村へと向かい、燃える家の中にいる両親を救い、実父らは川下にあるトパットゥミをした村へ仕返しに行った。

(説話 11)『ルペシペの娘の物語 (白鳥ヨソコ)』

主人公は両親や兄姉とともに暮らしていたものの、土間の隅に寝かされ、粗末な食器で食事をするような生活をさせられていた。しかし、下の姉と兄には可愛がられて育った。主人公が大きくなると父は下の兄と夫婦になるように言った。主人公は不思議に思いながらも、下の兄と二人、別棟で暮らし始めた。それから主人公はルペシペという言葉を聞くたびに気分が悪くなってしまう。

夫となった下の兄は、実家から帰って来るたびに浮かない顔をするようになる。訳を尋ねると、主人公がトパットゥミによって滅びたルペシペという村から来たこと、育ての父たちから主人公を殺すように言われていることを明らかにする。

下の兄と姉は主人公を助けるため、主人公を密かに村から逃がす。主

人公は村から逃げる道中で下の兄との間に身ごもった子どもを産む。そのうちに、主人公は大きな村にたどり着くが、そこは生き別れていた実の兄姉の家であり主人公は再会を果たす。主人公と実の兄姉たちは村人とともに、下の兄の住む村へと仕返しに向かい、弱り切った下の兄や姉らを救い出した。下の兄は自らの手で両親らを殺し、村にいた村人たちは皆殺しにされた。

(説話 8)『トパットゥミのウエペケレ (木村きみ)』

主人公は兄姉の末っ子として大切にされて育つが、家の外に出ることを禁じられ縫い物ばかりして過ごした。ところが父親はその着物をいつも下の兄に着せるので、主人公が不思議に思っていたところ、ある日父親からその兄と結婚するように言われる。兄妹は夫婦にはなれないと思いながら、夫婦として暮らし、子を身ごもった。出産が近づいたある日、何度も夢で鉄の箱が頭上で揺れる夢を見た主人公は、そのことを夫に伝えた。父親と夫はそのことで言い争いになっている。訳を尋ねると、夢に見た内容を伝えると父親たちが主人公を殺すように言うので、主人公を村から逃がすことにしたという。仮小屋に逃げて生活していた主人公は、食料がつきるなか実の兄たちが使う仮小屋にたどり着く。そこで兄たちから自らの素性を明かされ、主人公がトパットゥミによって連れ去られたことが明らかになる。

(説話 2)『霞の架け橋』の場合、主人公は育ての親から出自を明かされる前に、霞の架け橋を渡って知らぬ間に自らの手で主人公を襲った村への復讐を遂げている。育ての親は自分たちがトパットゥミに襲われる危険がなくなるため、出自を明かせるようになる。このように復讐を遂げることによって、主人公や主人公に関係する人々にふりかかる危険がなくなる。これを出自に関わる問題の解決とみると、『霞の架け橋』では育ての親がこの問題について悩む必要がなくなるために、出自が明らかになる。

(説話 5)『トパットゥミ　オッタ　アサハ　トゥラ　アエイッカ』では、冒頭主人公は実の姉と気づかずに遊んでいる。一方、その姉は主人公を実の妹と知って遊んでいる。姉は主人公との関係、自らの出自を知っていることを

村人たちに覚られ殺されてしまう。そして主人公も、亡くなった姉との関係に気づいているのではないかと恐れる村人たちによって命を狙われてしまう。主人公を救うために育ての両親は主人公に本人の出自を明かす。そして主人公自らの手で復讐をするように伝えて逃がそうとする。これは前段と異なり、主人公の出自に関わる問題を解決させるために育ての両親が主人公の出自を明らかにするというものである。こうした展開をとる物語はこの他に、(説話 8)『トパットゥミのウエペケレ』と (説話 11)『ルペシペの娘の物語』がある。

どの場合でも、主人公は無事に生き延びている。『霞の架け橋』のように自らが先に出自に関わる問題を解決している場合は、その後もスムーズに出自が明らかになる。一方で出自に関わる問題が解決されないまま主人公の出自が明らかになる場合、主人公は再び避難生活を強いられ、日常生活を取り戻すために出自に関わる問題の解決を迫られる。一度安定した生活が送れたとしても、根本的な問題 (主人公らの元々住んでいたコタンにトパットゥミを仕掛けた者たちとの関係) の解決がなされない限り、主人公らは再び不安定な生活を強いられる可能性がある。主人公は基本的にこの関係を復讐によって決着させる。もしくは断ち切ることで、不安定な生活から抜け出せる。

ここで主人公がうまく逃げ延びられるかどうかは、主人公の周りにいる人物にかかっている。どの物語においても、主人公のコタンに対してトパットゥミをしかけた者たちとの関係に決着がついていない状態で出自が明らかになる場合、主人公は主人公を助ける人物がいなければ生き延びられない。それは育ての親であったり、主人公の義兄姉であったりする。主人公はただ単純に生活を共にしていれば良いわけではない。助けてもらうためには彼らに大切にされる存在でいることが必要である。つまり主人公が日常生活を取り戻すためには、根本的な問題の解決とともに主人公の周りにいる人物との関係も重要である。

6　主人公 (アイヌ) とコタン (村) の関係

取り上げた 14 編の説話をみると、主人公と生活を再建するコタン (村) との関係は以下の四つに分類することができる。

主人公とコタンの関係分類

① 主人公が生まれた村や親族の村ではなく、育ての親の村など血縁関係のない者の村へ移って生活を再建する。
該当する説話 3 編 （説話 2, 7, 10）

② 主人公が生まれた村や育ての親など血縁関係のない者の村ではなく、親族の住む村へと移って生活を再建する。
該当する説話 5 編 （説話 1, 3, 4, 7, 11）

③ 主人公や主人公の親、兄弟らがトパットゥミの後に住んでいた家や仮小屋などを基にして村を作り、生活を再建する。
該当する説話 3 編 （説話 5, 6, 8）

④ 親族や他の村に住む村人の協力などを得ながら主人公が生まれた元々の村を復興し、生活を再建する。
該当する説話 3 編 （説話 12, 13, 14）

そのほかに、①～④までの分類と位相が異なるが、次のようなものもある。ここではこれを便宜上⑤として取り扱う。

⑤ 主人公が別の村をトパットゥミから救い、結婚や主人公の村への村人の移住といった交流を通じて村同士の関係を活性化する。
該当する説話 1 編 （説話 9）

取り上げた説話のなかで、⑤に唯一当てはまる『河童に助けられた男の話』がある。物語では主人公の住む村ではなく、主人公の結婚相手の住む村が襲われる。これは本研究で取り上げた他の散文説話と異なる点である。物語の梗概を示したうえで、説話に登場する河童がどのような位置づけにあるかを明らかにし、他の説話と異なる点について検討する。

（説話 9）『河童に助けられた男の物語』上田トシ

十勝川上流にあるコタンで両親と何不自由なく暮らしていた主人公は、父親から下流に住む知り合いの家にいる娘を嫁にもらうよう言われ旅に出る。道中、父親から教わった場所で泊まることにした。その場で祈りを捧げ、食事の準備をしていると河童が現れる。その河童は主人公の向かう村に明晩トパットゥミが来るという。河童はそれを返り討ちにする

ので、誰にもこのことを話さず主人公の手柄にするように言う。

翌日村へ着くと、村は宴会の準備をしており、村人は主人公を歓迎した。事前に河童に伝えられた通り、村人を一所に集め、空いた家々は火を消し留守に見せかけるよう指示した。宴会が始まると、村人たちは皆すぐに眠りに落ちてしまう。主人公が部屋の火を消すと、河童が家に入って来たので礼拝をした。しばらくして、主人公にもトパットゥミがやって来たのがわかった。すると河童は連中を皆殺しにした。河童は主人公が帰る道中でまた会いに来ると言い残して、その場を去った。

翌日たくさんの人間が亡くなっているのを見た村人たちは、主人公が夜襲から村を救ってくれたのだと思い感謝の言葉を述べ、宝物を贈ろうとした。しかし主人公はそれを辞退して、村長の娘と結婚したいと申し出ると、村長は喜んで受け入れた。その村で数日祝宴をあげると、主人公は自らの村へと娘を連れて帰った。道中で再び河童と会うと、河童は今回のことは主人公の父親にだけ話し、自分を祭ってくれれば良いと言う。主人公は村へと戻ると父親に事の次第を話して、父親はすぐに河童を祭った。その後、主人公は娘の村と頻繁に交流しながら年老い、子どもたちに河童のおかげ助かったことを忘れず、しっかりと河童を祭るよう言い残して亡くなった。

説話に登場するカムイを分類すると、①動物のような具体的なカムイ、②道具がカムイの働きをするようなマジックアイテム的なカムイ、③具体的な描写がなく正体不明のカムイの三つに分けられる。それぞれの分類によってカムイが果たす役割も異なり、物語における登場の仕方も異なっている。

①は、主人公の親代わりになったり、命を救ったりとカムイがどのように主人公を助けているのかが分かるようになっている。大抵の場合、カムイは主人公の守り神となって最後まで主人公を助けることになっている。一方、②のように道具がカムイの振る舞いをする場合、その道具が実際に主人公を襲う人々を倒したり、主人公の夢に現れたりして主人公を取り巻く状況を打開する手助けをしている。守り神ではなく、ある場面における主人公の置かれた状況を変化させる役割が強い。

③は②と比較的似ているものの、具体的な描写がないため正体がわからない。しかし、物語の流れとしてカムイのような働きがあったと考えられるものである。②に比べて主人公や関係する人々のとる行動を誘導していく役割が強い。

以上のような三分類を考えた上で（説話 9）の河童について考えると、①にも②にも当てはまるようにみえる。河童は、主人公が結婚相手（娘）の村に行く道中で一度、その娘のいる村を襲うトパットゥミを防いだ時に一度、主人公の村へと戻る途中で一度の計三回登場する。河童が突然主人公のもとに現れ、カムイの力でトパットゥミを防ぎ、最後に主人公の守り神になるという展開である。

この物語を娘の立場から考えると、（河童と）主人公は村を救った救世主である。主人公の立場からみれば、生活再建しなければならない状況に陥りそうにあった村を河童の助けによって未然に防いだ話ともとれる。主人公の目的は結婚相手を探すことである。ただ全体の筋を見ると、主人公は河童の助けによって形式的には娘の村を救っている。道中で河童と会ったことが重要である。河童がカムイの中でも特殊な存在である点は踏まえる必要はある。しかし、この説話は人間が上手にカムイとの関係を結べば、日常生活を脅かす事態を未然に防ぐことができる可能性を示しているとは言えないだろうか。

本論文で取り上げる他の説話では、主人公らがカムイの助けを得ながら生活を取り戻す姿を描いているが、この物語はカムイの助けがその生活を守るところで働くことで、生活再建にまで至る事態を未然に防ぐ姿を描く。ここから、カムイの働きが日常生活の再建過程だけでなく、日常生活を再建しなければならない事態を予防するという場面でも同様に現われることが明らかになる。

7　生活再建のプロセスにみる複数性

7.1　生活再建の複数性

物語ではアイヌの人々の中で原則として共通する考え方があったうえで、主人公らがどのように日常生活を再建するかによって複数の生き方が提示されている。これは正確に区別できるものではないが、全体としてその傾向が

見て取れる。

基本的な考え方として、子孫を絶やさず生まれた子を大切に育てること（子孫の繁栄）、そしてその子どもたちによって自らの老後を看てもらうこと（福祉の循環）、安定して日常生活を送れるようになること（生活の安定）はどの物語においても共通して重要である。しかし、そのほかの点については物語によって濃淡があり、それぞれの主人公に応じてそのポイントが異なっている。

7.2　それぞれのパターンによって異なる生活再建の方法

（以下の①～④は章 6 の主人公とコタンの関係分類に対応）

① 育ての親などが住む村に移ることで安定した生活を送れるようになる。
（コミュニティに入ること）

② 疎遠になっていた親族との関係を取り戻し、安定した生活を送れるようになる。（親族関係の回復）

③ 生き延びていた兄弟姉妹や親など家族との再会を果たし、彼らとともにもう一度村を再建して安定した生活を送れるようになる。
（離散した家族との再会、生活拠点の復興）

④ 村を復興して、主人公のそばにいたおじいさんや兄弟などの生活基盤を再生したうえで、安定した生活を送れるようになる。
（生活拠点の復興、家族の生活の安定）

大前提として主人公自身の生活が再建されることは重要であるが、そこでは同時に異なる達成がある。主人公はそれらも含めて実現されることで幸せになっているが、必ずしも始めから実現しているわけではない。まず目前の課題を解決しようと行動し、その課題が達成されることで、他の達成（といえるもの）も同様に実現されていく。それは生活の安定であるとともに、豊かさや繁栄でもあるような生活が送れるようになることであるともいえる。主人公は説話の終盤において、それらを振り返ることによって自らの幸福を感じている。散文説話では、主人公が物語の最後を締めくくる定型的な部分で達

成されたものが示される。その定型的な部分からも彼らの「幸せ」を読み取ることができる。物語では定型的な締めくくり方まで含めて彼らにとっての「幸せ」が表現されている。

パターンごとに大まかにその「達成」を示すとすれば、①はコミュニティに入ることである。主人公はトパットゥミで連れ帰られてからずっと同じコタンに住んでいる場合もある。しかし、仕返しをするなど主人公に関わる問題が解決されるまでは、主人公はあくまで暫定的にそのコミュニティにいる状態である。一方で問題を解決した後、主人公がコミュニティに戻ってくる（入る）ときは、よそ者であることには違いないが、コタンの一員として正式に認められているように思われる。そうした関係の変化は特に婚姻関係として現れる。

②は、親族との関係を回復することである。トパットゥミから生き延びた主人公は最終的に親族と会い、その親族の村へと移り住み生活を再建していく。トパットゥミによって疎遠になってしまった親族との再会が、主人公の生活再建を勢いづかせるという点で、これは一つの達成といえる。

③は、離散した家族との再会や生活拠点を復興させることである。トパットゥミのあと、それまで一人でいた主人公が離散してしまった家族との再会をきっかけに生活再建が始まっていく。しかし、『アスチヒ　イレス』のように③に含まれる説話には家族との再会はないものの、生活拠点の復興が始まるものがある。この説話では、家族となる者との出会いがきっかけとなって生活再建が始まっていく。主人公にとって再建に必要となる人物との出会いが、生活基盤となっていた場所を村として復興させるという動きを勢いづかせている。

④は、③と同じく拠点を村として復興させることがあったうえで、主人公を取り巻く家族の生活を安定させることも含まれている。村としての復興がきっかけとなって、主人公を取り巻く家族の生活も安定していく。

主人公は日常生活を再建しなければ生き延びられない。避難生活の日常化は生活再建ではない。安定した生活を送るためには①や②のようにコミュニティに入るか、③や④のように自らが村を再興するほかない。主人公らは日常生活の再建を通じて、最終的には子どもに恵まれ、衣食住に困らない生活

が送れるようになる。しかし、その過程にはいくつかのパターンがあり、それらは主人公の置かれた状況によって変化している。アイヌにおける日常生活の再建では、基本的な結果は一致している。しかしそのプロセスは上の①～④で示したように、それぞれの状況によって重視されている部分に差がある。再建プロセスの中には複数の展開の仕方があり、それぞれの主人公によって異なるプロセスをとりながら、結果として皆が幸福になるようになっている。その結果は決して画一的なものではないが、全体として「日常生活を取り戻し、幸せになること」という点では共通しており、そのプロセスには複数性がある。主人公の置かれた状況に応じて柔軟に対応できるようになっていることがわかる。これはアイヌの人々にとって「生活の安定」と「豊かになり繁栄すること」が根源的に区別されるものでなく、両者はそれぞれの生活再建や人生のプロセスの中で並行的に取り組まれるものであることを示している。

8　アイヌ＝人間の安全保障を考える

本研究では、アイヌ散文説話におけるトパットゥミのモチーフを含む物語からアイヌの人々の日常生活再建の姿を明らかにしようと試みた。研究の結果から、アイヌの人々にとって日常生活を再建することは、単純に衣食住が整うことではないことが明らかになった。そこにはカムイとの関係や人間関係をはじめとする社会的関係の再構築も含まれている。

「アイヌ」とは「人間」という意味である。つまり「アイヌ」の生活再建とは、「人間」の生活再建ということである。ここでは彼らの生活再建のあり方をもとに、「アイヌ（人間）の生活」という観点で、先住民社会から人間の安全保障（human security）について考察できる可能性を示唆したい。人間の安全保障は、もともと現代における開発に関連する議論の中で生まれてきた概念である。先住民社会から考察することの意義は、単に先住民社会との概念的類似性を指摘することにあるのではない。先住民社会の知が持つ柔軟性やその可能性を示すことにある。そして、彼らの知が現代社会を生きる我々に対しても開かれていることを示すことにある。つまり、アイヌの人々にとっての人間の安全保障が何たるかを考察することによって、我々にとっての人間の

安全保障が何たるかを考察することへとつながることを指摘したい。そのために、まず現代における人間の安全保障を概観したうえで、散文説話の分析を通じて明らかになった点を踏まえながらアイヌ社会の視点から人間の安全保障について考察する。

現代社会では紛争や政治的混乱などによって、多くの人々の日常生活が奪われている。こうした問題について、従来の国家安全保障（national security）は、国家主体間の武力的な均衡関係を基にして安全を保障してきた。しかし1970年代以降、非国家主体（市民組織や反政府組織など）と呼ばれる関係主体の存在が大きくなり、これまでのような国家主体間だけでの安全保障では十分に安全な環境を構築することが難しくなってきた[20)]。そこで人間の安全保障という考え方が提唱された。1994年に国連開発計画（UNDP）が発行した『人間開発報告書[21)]』において提唱されたこの概念は、「欠乏からの自由（freedom from want）」と「恐怖からの自由（freedom from fear）」をはじめとして、人間の生活への脅威に対して人間一人ひとり、個人レベルで対応しようとしたものである[22)]。

アイヌの人々にとっても、現代の人々にとっても日常生活を再建するうえで身体の安全は重要である。つまり、まず身の安全が確保されることが最優先である。アイヌ社会の場合についても本論文で指摘した通り、トパットゥミから生き延びた主人公の赤ん坊がカムイや人間によって助けられるところからも明らかである。しかし、身体の安全があるだけでは生活を再建することはできない。散文説話においては、身体の安全が確保される避難生活の段階で、一時的な危機回避と生活の暫定的な安定を得る。続いてコタンを作ったりコタンに入ったりする段階で、より安全な環境を得て、持続的な生活基盤を獲得し安定した生活を送れるようになっていく。この時点で主人公は生活再建を果たし、その後は子どもに恵まれたり、村が大きくなったりするなど持続的な開発が進んでいくようになっている。

現代の平和構築における生活再建は、安全の確保（安全保障）と復興（開発）が段階的になされていく[23)]。初期段階における停戦監視団や平和維持軍などの治安維持組織による安全の確保から始まり、政治体制の立て直しや人道的支援（例えば救援物資やキャンプ開設など）が実施される移行期間を経て、安

定した社会をより発展させるための開発へと進展していく。このように全体をいくつかのフェーズに区分することができる。これらは必ずしもそれぞれにおいて明確な区別がされているわけではないが、大まかな枠組みとして理解されている[24)]。アイヌの場合も現代社会の場合もそれぞれに大まかなフェーズが存在していることは同じである。

しかし、アイヌの生活再建においては、生活の安定（安全保障）と豊かさや繁栄を手にすること（開発）が根源的には区別されていない。現代における紛争後の復興と異なり、生活再建を通じて安全保障と開発が進められていくのである。生活の安定と豊かになることは、現代を生きる私たちにとっても分かちがたいものである。アイヌの人々にとっての生活再建は、単に日常生活を取り戻すだけでなく、その過程を通じて豊かになっていくものである。生活再建という一つの動きの中にあって両者が達成されていく。それは現代においても同様に求められていることではないだろうか。

アイヌ社会においては、単に衣食住が整った状態をもって生活再建を達成したとみなしていないことは既に本論中で述べた通りである。彼らにとっては、カムイとの関係も日常生活に含まれており、その点も含めて正常化されることが生活再建と捉えられている。一方で現代社会において生活再建といえば、物質的な側面に重きが置かれることが多い。しかし、アイヌ社会の生活再建は、そもそもこのカムイとの関係を前提にして行われていく。つまり、この世界にある物とカムイのつながりまでを含んで日常生活を成しており、それらは切り離せないものである。自らが生きている世界をどのように捉えているかということが、日常生活と深く結びついていると言い換えることもできる[25)]。このように考えると、現代社会に生きる我々にもその重要性が理解できる。現代においても生活を再建する人々が持つ価値観や文化に根差すことが、人々の生活を取り戻すうえで重要であることは指摘されている[26)]。しかし人々の世界との関わり方は、日常生活が脅かされた後の再建過程においてのみ重要であるわけではない。散文説話をみてみれば、人々が日常生活を営んでいるときから再建後に至るまで一貫して、人間とカムイとの関係（現代では人々の価値観や文化）が重要であることが分かる。

加えてアイヌの人々にとっての生活再建には、物質的な再建（衣食住の確保）

やカムイとの関係のほかに、それまで持っていたはずの人間関係の再生もしくは再構築、コミュニティへの参加や再興も含まれている。特に主人公が周辺の村とどのような関係を築くかは、主人公の生活再建において極めて重要である。村の復興を手伝うために移住してくる村人の多くが、主人公が良好な関係を持つことのできた村から来るためである。主人公が周囲の村の村長やその村の数名と関係を結ぶ。その個人的な人間関係をもとに村を復興する。そして復興する過程を通して、徐々に村ぐるみで周辺の村との関係を構築・強化する。

個人的な人間関係から村同士の関係へと広がりながら、主人公が周囲との関係を作り上げることが、生活の安全を保障することにつながっている。アイヌの生活再建は、実際に再建する者を中心として、その人物がカムイや他の人間と主体的な関係を持ちつつ、その関係性が個人間から村同士へと広がりながら進められていくのである[27)]。

現在でも近代以前であっても、日常生活を奪われた人々は必ず日常生活を取り戻そうと考える。これは人間が根本的に生存しようと考えているということだけでなく、「日常生活を送ること」それ自体が人々にとってまさに「生きること」であるからではないだろうか。それぞれの人々が考える価値観や世界の捉え方に基づかずに生活している状態は、単に生存している、生命活動を行っているに過ぎない。避難生活や難民として生活している期間が長くなると、人々は徐々に生きる希望を失っていくという。深刻な場合、あきらめ症候群や生存放棄症候群（resignation syndrome）と呼ばれるように、外界とのいかなる関わりも遮断してしまうこともある。こうした状態にある人は、彼らが考える生き方ができないばかりか、長期間にわたって自らの生き方を強制される環境下において、生活における希望を失うことによって世界との関わり自体を断絶してしまうとされている[28)]。生活の希望を失うことによる、人間の精神的な死ともとれる。しかし、こうした状態にあったとしても、「日常生活」を送れるようになる、もしくはそうした希望が見えてくることによって徐々に回復することがあるという。次のような児童の例が挙げられる[29)]。

5歳でロシアからスウェーデンへと避難した難民の子どもが、一家のスウェーデンでの難民申請が却下されたことをきっかけとして、それまでの活発さ

や気力を徐々に失い、ついには一切反応を示さなくなりあきらめ症候群と診断された。彼はその後、家族とともにスウェーデン政府から永住権許可が下りたことをきっかけに症状を改善させ、許可から二週間後には目を開けられるようになり、それからさらに三日後にはスプーンで水を飲めるまでに回復していく。その後、徐々に体調を回復させた彼は、学校生活へと復帰し、再び元気に日常生活を送るようになったという。スウェーデン社会庁(Socialstyrelsen)は2013年に発表したあきらめ症候群に関するマニュアルにおいて、こうした症例に対する現時点での効果的な対策として、永住権を付与することを挙げている[30]。これは児童が日常生活をこれからも送ることができるという希望を持てるようにすることが最善の策であるということだろう。そう考えれば、日常生活が単に生命活動の維持という点だけではなく、「人間らしくあること」も含んでいることが明らかになる。

9　結論

トパットゥミや人間の安全保障というと、紛争や戦闘といったものを想起してしまいがちである。しかし、本研究が明らかにしたように我々が近代以前から日常生活を取り戻したいと考えていることに鑑みれば、そこに生きる人々の日々の生活にも目を向けるべきである。戦争だけが近代から脈々と引き継いできた人間の特質ではない。我々には日常生活を送り続けたいという欲求もあるはずである。トパットゥミを描くアイヌ散文説話は、日常生活が具体的に語られるような物語のジャンルとして、戦闘ではなく生活再建に重点が置かれている。人間の暴力性ではなく生活に着目している。そして、彼らはそれぞれの人々の生活再建や人生について、「生活の安定(安全保障)」と「豊かさや繁栄(開発)」というものを根源的には区別できないものと考えていた。単に安定した生活が送れるようになるのではなく、そうした日常生活を取り戻すとともに、より豊かになるような生活再建のあり方はまさに人間(アイヌ)の安全保障といえる。

本研究では、特にアイヌ散文説話の一部のモチーフを取り上げて検討した。今後の新たな研究課題として次のようなことが挙げられるだろう。まず、アイヌ散文説話については、より多くのモチーフを取り上げることでより広い

視座が得られる可能性がある[31)]。また、近代以前の社会はアイヌ社会だけではない。他の地域における似たモチーフを取り上げて比較検討することによって、本研究で得た結論がどの程度、他の社会においても普遍的であるかを検証することができるのではないだろうか。世界各地に広がる近代以前の社会を映し出す物語を取り上げて、物語から社会を読み解く研究が進めば、現代社会にまで開かれる近代以前の社会が持つ知の広がりに私たちも触れられるようになる。

注

1) 以降アイヌ語の原語表記やその他の欧文表記については、原則として初出の場合にのみ示す。
2) 中川裕 (1997) pp. 82-86.
3) アイヌ語口承文芸コーパス (http://ainucorpus.ninjal.ac.jp/corpus/jp/)
4) 同コーパス
5) 同コーパス
6) 千葉大学 (2015a) pp. 1640-1662.
7) 同 pp. 1694-1740.
8) 同 pp. 2088-2108.
9) 千葉大学 (2015b) pp. 528-597.
10) 財団法人アイヌ無形文化伝承保存会 (1983) pp. 119-160.
11) 大谷洋一 (2016) pp. 57-77.
12) 財団法人アイヌ民族博物館 (1997) pp. 49-76.
13) 北海道教育委員会 (1988) pp. 11-54.
14) 中川裕 (2002) pp. 111-143.
15) 田村すず子 (1997) pp. 54-137.
16)「金成マツ採録ノート」から、藤田護によって訳出されたものを参考にした。
17) 本研究で筆者が作成したマトリックスおよび相関図については、academia.edu を通して公開している。
18) ケソラップ (kesorap) は、田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』(1996) ではキジやヤマドリ、萱野茂『萱野茂のアイヌ語辞典』(1996) ではクジャクと書かれている。辞書ごとにいくつかの鳥が挙げられているが、どの鳥であるのか確定されていないようであるため、本文ではそのままケソラップと表記する。
19) 藤田護 (2009) pp. 65-81.
20) 長谷川晋 (2017) p. 102, 人間の安全保障委員会 (2003) pp. 1-10.
21) 国際連合開発計画 (UNDP) が 1990 年から刊行している年次報告書である。毎年の世界的な開発課題を定義し、様々なテーマを設け、実証データの分析とともに政策提言を行っている。
22) 人間の安全保障委員会 (2003) pp. 10-12.
23) 吉高神明 (2004) p. 32, CSIS&AUSA (2002)
24) こうした一連の動きを PCRD (Post-Conflict Reconstruction and Development) と呼ぶこともある。
25) 中川裕 (2010) pp. 19-52.

26）長谷川晋（2017）p. 110, 人間の安全保障委員会（2003）第 4 章 .
27）現代において、生活を再建する者の主体性についての言及として梅垣（2005）が挙げられる。梅垣は人間の安全保障をめぐる現在の政策的議論における批判として、難民を例にとりながら彼らの主体性について、「その極度に困窮―経済的にも政治的にも―を強いられる状況のもとであっても生活を維持しようとする行動主体としての側面に注目するべきである。」（p. 15）と述べている。
28）Karl Sallin et al.（2016）, Göran Bodegård（2005）
29）Sandra P. Thomas（2017）pp. 531-532.
30）Socialstyrelsen（2013）p. 48.
31）本論文に関連するような研究のみならず、近年公開が進むアーカイブを用いた散文説話などの横断的分析や研究の可能性を指摘したい。特に、坂田美奈子による散文説話を歴史資料の一つとして用いる研究は複数の説話の横断的分析を行っており、本研究においても重要な示唆を多く得ている。また横断的分析を伴う研究においては、本研究が提示したようなマトリックスなどを用いる分析方法が一つの研究手法として有効であると考える。

参考文献

【散文説話】
「アイヌ語口承文芸コーパス」http://ainucorpus.ninjal.ac.jp/corpus/jp/（2018 年 8 月 17 日アクセス）
大谷洋一（2016）「アイヌ口承文芸「散文説話」―河童に助けられた男の話―」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』（1）北海道博物館 , pp. 57-77.
財団法人アイヌ無形文化伝承保存会、木村きみ（1983）「トパットゥミのウエペケレ」『人々の物語 FABLES OF MEN』pp. 119-160.
財団法人アイヌ民族博物館、上田トシ（1997）「夜襲で滅びた村の孤児姉弟の話」『上田トシのウエペケレ』pp. 49-76.
田村すず子（1997）「川上まつ子さんの昔話と神謡：民話 2　私はおじいさんに育てられて」『アイヌ語音声資料』（10）, 早稲田大学語学教育研究所 , pp. 54-137.
千葉大学、鍋沢ねぶき（2015a）「アコロ　エカシ　イレス」『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業第 2 年次（北海道沙流郡平取町）調査研究報告書 3/3』pp. 1640-1662.
同、平目よし（2015）「トパットゥミ　オッタ　アサハ　トゥラ　アエイッカ」pp. 1694-1740.
同、黒川てしめ（2015）「アスチヒ　イレス」pp. 2088-2108.
千葉大学、平賀さだも（2015b）「ケソラップ　カムイ　イレス」『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業第 2 年次（北海道沙流郡平取町）調査研究報告書 1/3』pp. 528-597.
知里ブイヌマッ口述、藤田護訳（2017）『uyepekere chiri buinumat kip』北海道立図書館所蔵金田一京助宛金成マツノートより .
中川裕（2002）「アイヌ口承文芸テキスト集 3：白沢ナベ口述 トパットゥミから逃れたウライウシナイの少年」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』（5）, 千葉大学ユーラシア言語文化論講座 , pp. 111-143.
北海道教育委員会、白鳥ヨソコ（1988）「ルペシペの娘の物語」『アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズⅠ アイヌ民話』pp. 11-54.

【参考資料】

梅垣理郎 (2005)「ヒューマンセキュリティと総合政策学」『総合政策学ワーキングペーパーシリーズ』(81), 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 , p. 32.
奥田統己 (2017)「アイヌ口頭文芸研究の課題」『こえのことばの現在―口承文芸の歩みと展開』三弥井書店 , pp. 247-261.
国連開発計画 (1994)『人間開発報告書 1994』国際協力出版会 , p. 227.
児島恭子 (2010)「散文説話の社会的機能」『伝承から探るアイヌの歴史』札幌大学付属総合研究所研究叢書 (1), 本田優子編 , 札幌大学付属総合研究所 , pp. 299-331.
坂田美奈子(2011)『アイヌ口承文学の認識論―――歴史の方法としてのアイヌ散文説話』御茶の水書房 , p. 227.
坂田美奈子 (2015)「アイヌ口承文学的解釈学の創出」『科学研究費助成事業研究成果報告書』p. 5.
知里真志保 (1973)「ユーカラの人々とその生活」『知里真志保著作集』(3), 平凡社 , p. 594.
中川裕 (1989)「口承文芸に見るアイヌ人と和人の関係」『民族接触―北の視点から―』六興出版 , pp. 73-85.
中川裕 (1997)『アイヌの物語世界』平凡社 , p. 283.
中川裕 (1998)「報告 3　口承文芸に見るトパットゥミ」『平成 9 年度　帯広百年記念館アイヌ文化シンポジウム「アイヌ民族の文化と歴史を再考する」報告書別刷』帯広百年記念館 , pp. 51-59.
中川裕 (2010)『語り合うことばの力―カムイと人間の生きる世界』岩波書店 , p. 231.
人間の安全保障委員会 (2003)『安全保障の今日的課題　人間の安全保障委員会報告書』朝日新聞社 , p. 288.
長谷川晋 (2017)「非国家主体研究から見た紛争解決学と安全保障学の接点」『研究論集』(106), 関西外国語大学 , pp. 99-108.
藤田護 (2009)「飢饉を主題とするアイヌ神謡――人間とカムイの世界の対称性、起原の探究、語りの自由――」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書『アイヌ語韻文表現法』』(188) 中川裕編 , 千葉大学大学院人文社会科学研究科 , pp. 65-81.
吉高神明 (2004)「紛争解決後の平和構築 : 国連平和活動の文脈において」『商學論集』(72), 福島大学経済学会 , pp. 31-52.

Bodegård, Göran (2005) “Life-threatening Loss of Function in Refugee Children: Another Expression of Pervasive Refusal Syndrome?”, *Clinical Child Psychology and Psychiatry* 10:3, pp. 337-350.
Center for Strategic and International Studies(CSIS) and Association of the United States Army(AUSA) (2002) *Post-Conflict Reconstruction Task Framework*, p. 20.
Commission on Human Security (2003) *Human Security Now*, N.Y., Commission on Human Security, p. 159.
Sallin, K., Lagercrantz, H., Evers, K., Engström, I., Hjern, A., and Petrovic, P. (2006) “Resignation Syndrome: Catatonia? Culture-Bound?”, *Frontiers in Behavioral Neuroscience* 10:7, pp. 1-18.
Socialstyrelsen(www.socialstyrelsen.se) (2013) “Barn med uppgivenhetssyndrom En vägledning förpersonal inom socialtjänst och hälso- och sjukvård”, p. 76.
Thomas, Sandra P. (2017) “Resignation Syndrome: Is it a New Phenomenon or is it Catatonia?”, *Issues in Mental Health Nursing* 38:7, pp. 531-532.

United Nations Development Programme (1994) *HUMAN DEVELOPMENT REPORT 1994*, N.Y., Oxford University Press, p. 226.

【辞書】
「白老アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ」（http://ainugo.ainu-museum.or.jp/）
辞書についてはアイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ HP 内の以下の辞書を含む辞書検索機能を利用した。
田村すず子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』草風館 .
萱野茂（1996）『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂 .

〔受付日　2018. 3. 12〕
〔採録日　2019. 1. 31〕